

「天和三年」と刊記せる

脚本『うかれきやうげん』の存在

所謂「狂言本」でなく「脚本」の體裁を完備せる最も早いもの

頃日、私は『うかれきやうげん、播州金岡長者之沙汰』といふ半紙本、繪入六十一丁ある珍しい「狂言本」を獲た。

「狂言本」ところにいふが、謂ふところの「狂言本」とは大に體裁、形式を異にし、我が歌舞伎書史に、いろ／＼な意味において暗示に富んだ「脚本」である。我が發生初期における、資料に乏しい「歌舞伎」について、考へさせらるるところが多いから、こゝにこの『うかれきやうげん』を紹介し、併せて私の考察を述べてみようと思ふ。

數年前の事であつた。守隨憲治氏が、雜誌『歌舞伎研究』（昭和三年二月）誌上で、『脚本好色傳受』の存在を發表された。『好色傳授』は、所謂「繪入狂言本」でなく、「臺詞とト書き」によつて成立したものの、「説明的辭句の一切ないもの」「脚本といふ文學書史の第一頁に『好色傳受』は位置すべきものなのである。この書は元祿六年の印行である。だから若しこれが、かゝる形式の書物の最初の發生であつたとすれば、近世文藝書史の上に「脚本」の發生したのを元祿六年としていゝ事になる。」——と守隨氏は假定の上に、推考を進められてゐたのを読んで、私は、所謂脚本——臺詞とト書から成る「脚本」の發生は、元祿六年よりは、ずつと遡るものぢやないかと思

つた。たゞ思つただけの、何の資料があるといふのではないが、淨りりの發達、淨りりの組織が完成への道を辿つてゐるのを考へて、たゞさう思つた。丁度その頃私は、「洒落本」のあの會話體の文體の、據つて淵源するところは、「脚本」から派生したものに違ひはあるまいが、所謂「繪入狂言本」からは、系統は出ない。とすると、後世の「脚本」の體裁が、相當古くから存在したゞらうと考へてゐた。そして實在の資料としては、延寶八年の『浪花鉦』に、既に「脚本體讀物」の形式の片鱗を讀んで、「脚本」の發生の遠く古い事を考へてゐた。そして『好色傳授』の原本を大阪鹿田松雲堂の好色本目錄中に發見し、大阪の藏書家青木平七氏が、鹿田本を購入されたのを借覽して、歌舞伎書史の上から、脚本形式の發生を、『好色傳授』の元祿六年とするには、何んとしても若かすぎると直觀した。私が青木本での寓目した『好色傳授』は、上中の端本で、下の卷を缺いてゐるが、守隨氏がこの書を『歌舞伎脚本集』に収録されたのを、後に見て、下卷に南京操を南北三ぶが、「人形振」で上演してゐるのを讀んで、人形と歌舞伎との交渉のいとも古い事に想到した。そして「脚本」から「洒落本」への水脈はとう／＼手繰る事が出来ないで、「脚本」と『浪花鉦』の脈絡も考へ得ず、また『浪花鉦』と「洒落本」との糸は、ぶつつりと斷れた奴胤のぶら／＼と數年の月日が経つた今日、私は元祿六年より丁度十年遡る。

脚本「うかれきやうげん」の存在

天和三年癸亥三月上旬

京 山本七郎兵衛

大阪 西澤太兵衛

と刊記のある『うかれきやうげん』三番續——といふ、謂ふところの繪入狂言本でない、臺詞とト書とで成立し、説明的辭句の一切無い、後世の脚本形式をそのまゝに整へたる三番續を獲て、いろ／＼な暗示と發生初期の歌舞伎の舞臺について教へらるゝところが多かつたのである。

『うかれきやうげん』の體裁からいふと、「上」が二冊（廿四丁）で「こゝまでにて一番目のをわり也」とある。「中」が二冊（廿三丁）で二番目が終り、「下」は一冊「十一丁」で、「千秋萬歲」となつてゐる。外に「口上」が一丁。場割が一丁。役人付が一丁。縮めて六十一丁で、挿繪は、「上」に七面、「中」に八面、「下」に三面で、冊子にして五卷、番數にして三番組織である。繪は上方の狂言本に多い吉田半兵衛風の筆意である。

『うかれ狂言』の成立を考へるには、卷頭の「口上」が唯一の材料で、多くの暗示を含んでゐる

から、左に全文を引用しておかう。

口 上

さていづれもさまへ御ことはりを申上ます。

只今ひろめます。此うかれきやうげん五冊は。播州金岡長者之沙汰。三番續で御ざります。近代世に行はなしの本。かなざうしは。にてにざる物がたりにて。さしてわかりました事も御ざりませぬ。何かれめづらしき事をいだし。御なぐさみのたねをもうけましたふ存ます所に此道にすぎの方様。秋の夜長のなぐさみに。此狂言記を御つくりなされましたを。ぜひにと懇望いたし。各々様の興にも成ましかと。板行に出しますように御ざります。ほつたん序のとりくみより。三ばんめの終までとくと御心をしづめて御よみなされませ。殊の外入くみたる儀で御ざりますれば。しぐみ。ことばつき。萬事ふつがうがちに御ざりませうずれ共。その所は。大よりに御らんじなされてくだされましょ。萬端申上た義御ざりますれ共。かへつて御たいくつに御ざりましょ間。おつ付此よみ出しが。播州金岡長者之沙汰。三番つゞきの初で御ざります。左様に御心得なされませ。

作者 山 本 遊 學

とある。次に幕と場とでもいほうか、章と節とでもいほうか、各場面の目次がある。左の如くある。

脚本「うかれきやうげん」の存在

上

一 はんじやうにて候

一 さまたげて候

一 あらはれて候

一 あはれにて候

一 もつともにて候

中

一 むりにて候

一 なさけにて候

一 たのもしく候

一 よくにせて候

一 ふしぎにて候

下

一 手がらにて候

一 おもしろく候

金岡之家

うす雲の祝言

戀のかけすこ六

あさがほのさいご

七太夫のほつしん

村雲がぬれ

早川采女

丹山のせいもん

姫の御地藏

主従の縁

門十郎けんくわ

松風の琴

一 やさしく候

絲による鹿

一 じやうじゆして候

あたごへの日参

一 めでたく候

御代は萬歳 終

役人付

一金岡長者

一同みだい

一同姫うす雲のまへ

一殿家老村雲八郎

あく人がた

一同けらい早川采女

一姫の家老小篠七太夫

しゆけしてのち清月といふ

一同けらい中井右近

一こしもとあさがほ

一同ゆふがほ其外三三人

一御つぼね三三人

どうけがた

一寺のじうぢ丹山

脚本「うかれきやらげん」の存在

一同小姓友之丞

一同主計

一櫻宮家老竹内門十郎

一あさがほ親夫婦

一さかの茶やおさん其外出女二三人

一ちや屋のていしゆ二三人

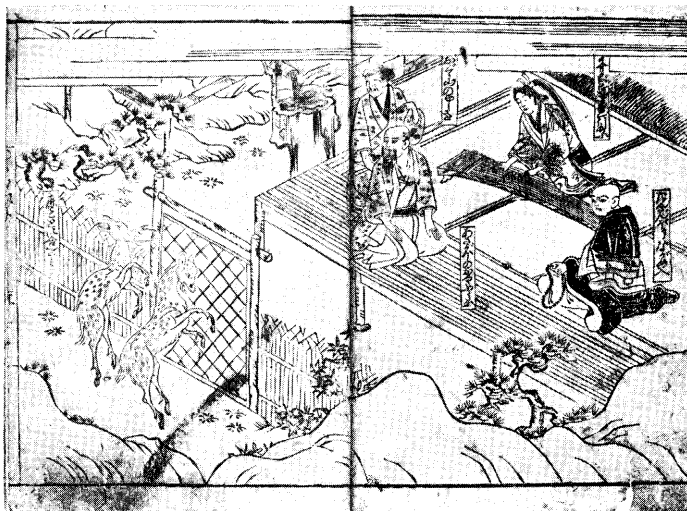
一小倉山の鹿あまた

一右の外さふらひ方あまた

實がた

終

とある。この口上に署名して「作者山本遊學」と名乗つてゐるが、「口上」の文面から見ると、作者は、今日謂ふところの作者でなくて本を作つて即ち刊行した人らしい。「此道のすきの方様：此狂言記を御つくりなされましたを」とあつて、「ぜひに懇望して……板行に出しますようにござります」とある山本遊學は、所謂作者でなくして刊行者らしい口吻である。そして刊記をみると、「京山本七郎兵衛」とあるから、「遊學」は山本七郎兵衛らしく思はる。即ち狂言作者としての署名の始は矢張從來傳説の通り、富永平兵衛なのであらうか。



△「天和三年」と刊記せる

脚本「うかれきやうげん」の存在▽

「うかれきやうげん」の三番目切の挿繪

(鹿をどりの鹿が、役人次第に一役に出てゐる)

もう一つこの「口上」と「役人付」に配役がない。俳優名がなく、またどこの座で演じたものであるともないのを以て見ると、最も古い脚本形式の一つではあらうが、或は實際の舞臺には上演されなかつたものではないか。即ち舞臺上演に擬して綴られたる山本遊學の謂ふところの「はなしの本。かなざうし」などではあるまいか。——後世にいふ「正本製」「讀む脚本」ではなかつたか。——「讀む脚本」を、刊行者山本遊學は「狂言記」といつたのぢやないか。或はそれとも上演したものなのか、この天和期の歌舞伎發生初期の資料は、極めて乏しいから、今日俄かに何れとは斷じられないが、併し上演可能、當時の原始舞臺をまぎ／＼と想像するに足る實在の「脚本」形式を具備した狂言記であることだけは間違ひはない。

更らに按ふに、我が歌舞伎の發生期にありては、所謂「繪入狂言本」が、今日示すが如く、唯「筋」と「登場人物」が決定してをり、臺詞と役人の出入は、各優のそれぞれが工夫になつたことであるから、毎日臺詞に多少の出入あり、その日／＼の工夫が、俳優の出來榮であつたのではないか。後世芝居道にいふ「口立」とか「つかみ合ひ」などは、その餘風であり、「操」の如き、淨るり詞章の儼存するものでも、節と三味線とでは、舞臺へ出た時勝負の「裸」などいふ言葉が、今日尙存するのは、これらの往古の歌舞伎、操の遺風を示してゐるものではあるまいかと

思ふと、彼の西鶴の『男色大鑑』に瀧井山三郎の舞臺を記して

童戯坂東又次郎が輕口、萬能丸五郎兵衛が答話、其日思ひの外仕組違ひてせりふ入亂れければ、山三郎纔の所に言葉の綾きれざりき

とあるなど當時の原始期の歌舞伎の舞臺が想像さるゝやうに思ふが、どうあらうか。即ち發生期の延寶天和の歌舞伎の舞臺が、毎日臺詞に出入がある程度の脚本とすれば、今日残る『繪入狂言本』がその歌舞伎の姿の反映であると観てはどうあらう。偶々『好色傳授』の作者小島彦十郎の如きがあつて、

……今まで狂言本數多あると雖も、九牛が一毛にて、一つとしてあやち聞えず。此度出す本は、三番續始より終まで、臺詞残らずづぶさに書記し出す者也

と言つてゐるが、何ぞ知らん、その脚本形式は、十年前の「讀む脚本」のうかれ狂言の試みしものに據つたのではあるまいか。そして悉く臺詞を書き記し、俳優の所作、出入まで示したのだが實際には『好色傳授』が明示した如き舞臺は作られずに、却つて「あやち聞えず」正本と舞臺とでは格段な相違が實際の舞臺に出來たので、この作者小島彦十郎も、『好色傳授』の後三年にして、『大雜書伊勢白粉』（元祿九年）を刊行した時には、ありふれた在來の「繪入狂言本」に取戻

つたのではあるまいか。すつと後世の我が歌舞伎脚本にしてからが、興行毎に、俳優の都合によつて、大小の抜差があつて、歌舞伎脚本の定本などといふものは、實際にありようがなく、存在しないのが本来の歌舞伎の姿だと考ふる時に、天和元祿の昔に、形式の整へられた脚本のあらう道理がなく、「繪入狂言本」しかないのが、本来の歌舞伎の面目ではあるまいか。——然らばこゝに提出の「うかれきやうげん」は、何であるかといふに、上演しない歌舞伎の脚本に擬した「はなしの本。かなざうし」であつて、この「さうし」によつて歌舞伎の舞臺に接するが如く幻想せしめようと努めたのが、「此道のすきの方様」であつて、斯くして「讀む脚本」から後世の所謂「脚本」は生れ出たものではあるまいか？

そしてこゝにいふ「うかれきやうげん」とはこの脚本の名題、外題ではなくて、「歌舞伎狂言」に對する「うかれきやうげん」といふ一つの普通名詞で、「舞臺の狂言」に對する「讀む狂言」の意ではあるまいか。即ち「うかれ」の意は「娛樂」の意味、「遊戯」の意「舞臺狂言に擬して樂しみ讀む」といふ意味を含めて「うかれきやうげん」と稱し、狂言の外題は『播州金岡長者之沙汰』三番續とて、内容を明示した言現はし方で、聽て外題への直前の形式ではないかと考へる。

そして三番續の各幕？ の内で各場を、「はんじやうにて候」とか「さまたげて候」とか言ふ風

脚本「うかれきやうげん」の存在

に、區別して各場を現はしてゐるところに、何處かに假名草子の名残が忍ばれるのを「讀む脚本」の一證左と見られまいだらうか。

稀觀本だけに、私は筋を左に述べながら、延寶天和の歌舞伎における舞臺の暗示を記してみようと思ふ。

「上」――

右の方より長者夫婦出ル左の方より
からう村雲八郎其外さぶらい四五人出ル

といふのが、眞先の開卷劈頭のト書である。金岡の長者と八郎との臺詞のやりとりで、長者の娘薄雲が「七ちゃん萬寶はくらにみち何にふそくもなふ。かたをならぶるものもない。殊にひとりのむすめ」が「都大内たけひの大納言ありすみの子息櫻の宮」との祝言の用意の場で始まる。殿の家老八郎は、姫と櫻の宮との婚儀は悪いと上言する。姫は播州室の明神の申し子である。姫の家老七太夫が櫻宮との婚儀を勧めるのは「仲人口」であるとして八郎と七太夫とは、長者の御前で争ふ。長者は扱ひ兼ねる。七太夫は未解決のまま、室の明神へ祝言の報告に詣參する。一人残つた八

郎は、命かけて姫に思をかけてゐるから「此度の祝言さへさまたぐればおれが戀は叶ふといふ物じや」とて、七太夫の留守に姫を邸に襲ひ、「承引なきならば、引つかまへ身をづたくにして本望をとぐ」といふので八郎に従ふ武士は「扱も荒いぬれでござります」と驚き、

皆々走り樂屋へはいる扱ひめの屋敷がま

への道具かざりおくこしもとあさがほ出、そこらしの
ぶていにて文ひろげてよみてゐる所へ……………

と、卜書があつて、八郎が武士を連れて襲ひ來る。姫付の局やこし元朝顔夕顔など、八郎一味と斬結ぶが、女力の抗ふやうもなく侍女たちは斬られて姫は八郎が擔いて何處とも知らず逃のびる。七太夫明神から下向して、この體に驚く、朝顔も夕顔も七太夫を戀ひ、朝顔と七太夫とは、末を語らふ割なき仲であつた。手負の朝顔から事の仔細を聞いて七太夫残念がり、朝顔の落入るのを見て、七太夫無情を感じて剃髮し、僧形で諸國を行脚して薄雲姫の行方を探さうといひつゝ、朝顔との「さらば〜」の今世の別れの言葉で一番目が終つてゐる。

「中」

八郎がやかたのていをかざり八郎
うすぐも姫の手を引つれ右ノ方より出て

二ばん目は、八郎の「ぬれ」で始まる。姫は手強く八郎をしりぞける。櫻宮のひな男がよくば俺も鬚を剃らうと八郎が「髪、ひげそりてぬれる」場があるが、この場で、

八郎「ひげをきらふ人があればしよせんいらぬ物ぢや。はやくきてそれうねめ」して其御きらひなさ
れます方は。どなたで御ざります 八郎「こりや

といふてひめの方を
目つきにておしゆる

と、卜書があつて、俳優の科をも示してゐる。八郎のぬれに姫が應ぜぬので、八郎は「ふつとなびかぬな。こりや」と姫をつき倒し、刀を抜き懸つて、既に討たうとするを、八郎のけらい早川采女が、押し止め「あつたら手へ入たる花をちらすと申物」だとして、主人に代つてうんと言はせましようとおしめ、尙も姫をば討たんとする八郎をうねめ「まづおまちなされませ〜」

といふて右の方のがくやへつれはいるうすぐも
ぶたいに一人うちふしなげきゐてせつきやう

と、卜書があつて

せつきやう▲あはれ威かなひめ君は。おもひもよらぬうきめにあいきもたましいもあらはこそ。あけく
れなげかせ給ひける。心のうちこそあはれなれ、やれいかに物のふよ。やたけにわれをせむるともみち
なき事に。何しに心にしたがふべし。いきがかよへば物思ふ。もの思ひせんより。はやく命をとり。
わが本もうをたつせよや。あゝみづからは。いかなるいんぐわのめぐりきて。じやけんのものにとらは
れ。かゝるうきめをみるごうの程こそかなしけれ。かく威はてゝ有ければ。うぢ神むろの明神も。見す
てさせたまふかや。さだめてこよひのうちにはあの人めが手にかゝりやいばにかゝりてあいはてん
はぢでう也。あゝうらめしやさなきだに。女はごしやうさんじうに多らはれてざいがうふかきとうけ給
はる。ましてやいばにかゝりなば。さぞつみふかゝらん後の世まで。思ひやられてかなしやと。其まゝ
そこにたふれふし。りうていこがれてなげかるゝ。さりながらこれも。ていぢよの道を立るゆへなれば
よもや佛神三ほりも。ふびんとはをぼしめさん。もしこよひ相はてなば。來世は玉のれんだいに。すく
いとらせたび玉へ。南無あみだ佛みだ佛と。しんぢうにきねんをし。思ひきつたる御有様。げにことは

脚本「うかれきやうげん」の存在

りとぞきこへける。くにもとにをわします。ちゆうへ様や母うへ様、かく成はつるをしろしめされず。わらはがゆくゑをしらくもの。そなたばかりこひしぞと。なげきくらしはおはすらん、うきめにあふ我身よりちゝ母の御事が。思ひやられてかなしやと。又さめくんとぞなげかるゝ。しよじのあはれときこへける。あゝなげくまじや〜。かくなりはつるもくわこよりの。さだまることと思へば。なげく道にてなし。とは思へども。昔にかわりし有様やと。こしかたゆくすへ。思ひわづらひ給ふゆへ。御心もつかれはてしばしまどろみ給ひける。姫君の心の内。あはれ共中〜。何にたとへんかたもなし。

なげきながらねいる所へあさがほの

ゆふれいうすぎぬかづき出ひめのまくらもとに立

といふのが説経節の全文である。この條りなどは、後の十分發達した、歌舞伎の舞臺を想はしむる。天和の昔に、既にこれほど發達してゐたのだと驚かされる。假令この「うかれきやうげん」が、實在の舞臺にしる、「讀む脚本」にしるのである。そして歌舞伎のチヨボの權輿を、今日まで、正徳四年二月、大阪嵐芝居の『天神記』からであるといひ、或は寶永五年秋大坂岩井座の『丹波與作』からであらうなど言つてゐたのが、をかしい。この説経節が、全くチヨボだ。當流淨るり

以前に、説経節が既に／＼後世のチヨボと同じに、かういふ舞臺、場面にクドキとして用ゐられてゐた一つの證據と見ることが出来る。と、チヨボの嚆矢も、吾々が考へてゐるよりは、すつと遡らうと思へる。

かくて、朝顔の幽霊が、姫にこの邸を、今宵落延びよ、邸を出て西へ／＼と行くと寺があるからその寺へかけこむと世に出られると勸めて朝顔は消ゆる。夢さめたる姫が嘆いてゐると、早川采女が來て姫の身の上を不憫に思ひ、案内してこの邸から落す、綿帽子に顔を包み、路錢をも添へて渡す。

といふてうすぐもはしがよりの
方へはしりがくやへはいる

と、「卜書」があるから、この舞臺が橋が／＼のある原始的の舞臺である事が想像される。采女は「はて偕世にはいたはしい事がある物かな。是から又たんなのしゆびもつくらを。だんな御ざりますか」と采女がわざと、傍白で騒ぐ。姫が逃げたと聞いて八郎は武士を連れて追手に向ふ。

「いそげ／＼」

脚本「うかれきやうげん」の存在

といふてみなくはしりはしがりの方へ
はいると寺がまへの道具出し門をたて持佛
堂をおく丹山ふたりの小せうをつれて右の
方より出

といふト書があるので、この場の道具替りの様が想像される。この寺の丹山といふ住職が道化方で、色好みかと思ふと討死した侍女朝顔のおちで、後半は道化ではない。丁度後世の上方にある二枚目のやうな役柄が暗示される。——例へば『伊賀越』の歌舞伎の舞臺における沼津の里の重兵衛といふ役處が仄見える。重兵衛がお米の容色に引かれて立場茶屋から、平作の住ひに泊らうとするまでの上方芝居の重兵衛のやうな——年配は違ふがあつた二枚目の原始的の姿がこの丹山に暗示されてゐる。驅込んだ薄雲姫を、丹山がかくまひ、八郎を追返へすのだが、この場で「八郎せかぬふりにて」などの臺詞廻はしのト書まであつて、丹山が若い女を隠してはゐないとて、諸岡の神を勧進して神落しを「ごまの壇をかざり」て誓ふ。その誓文の段が、京大坂野良名づくしといふ趣向になつてゐる。

今試みに野良名づくし、野良名を列擧すると左の如くである。

勘太郎。三彌。千彌。竹中吉三。市川萬太夫。吉彌。辰之介。松本三四郎。梅之丞。數馬。金之丞。道頓堀今吉彌。同辰彌。吉川多門。岸田才三。……

などいろく野良名づくしがあり、「京の壺やも太夫本ふじ田や是も太夫本」など巫山戯てゐる。この誓文で追手八郎を追返へし、姫が寺を出ようとするのを丹山が留めてぬれになる。時恰も新入の弟子で堅造の清月が歸つて來る。姫の姿を清月に見つけられるとバツが悪いといふので、丹山は姫を綿帽子のまゝ地蔵に見立て、持佛堂へ押入れる。清月は役人付にもあるやうに剃髪した七太夫である。持佛堂の扉を開けて禮拜し、地蔵の姿が、行方を探し求める姫に似てゐるといふので、清月は涙を流すのを、丹山に見咎められて、身の上を話すといふをかし味に、姫は、綿帽子を投捨て、持佛堂を轉び出て主従の對面となつて、二番目が終る。

「下」——京は嵯峨の茶屋はたご屋の體。茶屋の出女が愛宕詣りの諸人を呼んでゐる。櫻宮の家老竹内門十郎が、主人の代詣で百日詣をして、許嫁の薄雲姫の行方を祈願してゐるが、恰もこの日が満願日である。門十郎の挾宮持の柄が當つたとて、挾宮持を取押へる喧嘩の相手が村雲八郎である。八郎は主人の門十郎に喰つてかゝる。果ては門十郎と八郎とが斬結んでゐるのを留めた法

師が清月坊で、一切の事件が解決して、門十郎が八郎を取押へる。一方薄雲姫は、丹山に連れられて嵯峨に佗住ひの朝顔の老いたる兩親の許にかくまはれてゐる。老夫婦が世にありし頃のすさびの松風といふ琴を出して慰みにしてゐる。

といふてとりくの小うたを琴にて引きりに
しゝをどりを引小倉山のしかあまた出をどる

といふ卜書があつて、姫の琴の音に合せて鹿がをどる。役人付にも「小倉山の鹿あまた」とあつて鹿も一役買つて出てゐるのも面白い。

こゝへ門十郎、清月に引かれて八郎主従が来る。姫は、八郎の邸で綿帽子を貰うて落してくれた早川采女を八郎の従者の内に見出して、その恩に報ひんと采女の繩を解く。姫の無事を播州の長者の許へ申やつた使が、歸つて来る。悪人八郎は國元へ引渡して、殿の「計ひにいたしましたよ。先めでたふ御立被成ませ。

といふてまいだち
にして見なくはいる

千秋萬歳となつてゐる。

この荒筋でも判るやうに、説教節をクドキに用ゐてゐるやうに、説教系統の長者の姫が、人さ
らひに會うて難義をするといふ、假名草紙、人買系統の脈絡が趣向の本筋になつてゐる。脚本の
形式といひ、内容といひ、後の歌舞伎を生むいろ／＼な暗示が、想像さるゝこの舞臺に含まれて
ゐる點、野良名寄の神落しに幾多の考證資料が存してゐるのだが、延寶天和の歌舞伎の資料は極
めて乏しく、これ以上の考察は、他日を期する外、道がない。

付けていふ。この「うかれ狂言」五冊は米山堂發行の稀書複製會の第九期で、複製されるから
その道の諸家の研究が聴きたい。

(昭和九、一、一)

